

小川 廣男
小池 正博
西田 青沙
森川 敬三

共選

特選

半歌仙『這ひ出よ』の巻 滋賀県

谷澤 節 捌

這ひ出よ飼屋が下の蟾の声

芭蕉翁

土間の隅には行水の桶

谷澤 節

眠たげな頑是無き児を背に負ふて

松本奈里子

散歩がてらに九九を教える

もりともこ

満月の湖に滲曳く丸木舟

節

風のかたちに揺れる葦原

里

名刹の胎内巡り秋深め

と

ミケランジェロのピエタ美し

節

ふと漏れた言葉の意味を計りかね

里

寝物語は甘く切ない

節

にせものの家系図広げしたり顔

と

寒禽てらす月は青ざめ

里

サイレンの音に飛びだす火事明かり

節

一番乗りは貧乏神か

と

肩ならべ親父とくぐるのれん酒

里

浅蜷佃煮江戸の土産に

節

花筏迷路のような堀をぬけ

と

見はるかす野に蓬摘む人

里

令和五年七月十五日 満尾 文音

入選

半歌仙『后ざね』の巻

東京都 夢々連句

静 寿美子 捌

美しきその姫瓜や后ざね

芭蕉翁

餌を待ちて鳴く軒の子燕

静 寿美子

とんぼ切る役者の演技絶妙に

後藤とみ子

挨拶代り噂かしまし

柳田 宏子

満月に引かるるやうに観覧車

三輪 慶子

秋風にのりマーチ軽やか

と

色葉散る参道走る若き祢宜

寿

告白せんと深呼吸して

慶

フィアンセの披露目パーティー船上で

宏

暮らしのリズムやつと整ひ

と

戦地より避難の一家辿り着き

慶

区会議員に立候補して

宏

猟犬の深眠りする森に月

と

奥へ奥へと雪女呼ぶ

慶

婆のまね南無阿弥陀仏唱へだし

宏

島の架け橋祝ふ竣工

と

乾杯にほしいまなる花吹雪

寿

蜂の巣箱の並ぶ草原

慶

令和五年五月三日 満尾 文京区民センター

入選

半歌仙『衣がへ』の巻

岡山県

赤のまま

中岡 実来 捌

一つ脱いで後に負ひぬ衣がへ

芭蕉翁

青田を渡る颯々の風

永禮未鬼

道の駅地元特産山積みに

黒瀬琢葉

有機野菜で保つ健康

中岡実来

満月に影を戴きウオーキング

琢葉

友待つ庭につづれさせ増ゆ

未鬼

新酒酌み高歌放吟父の客

実来

浮気薬を混ぜたのは誰

琢葉

走り来よ跡振り向くなと囁かれ

未鬼

ハートのピアス撫でる君の手

実来

神在ますジャングルジムの頂辺に

未鬼

おてんば娘特技竹馬

琢葉

若き棋士長考の背に寒の月

実来

三半規管緩み始める

未鬼

フィン付けて美ら海ダイブしてみるか

琢葉

私はつばめ空が遊び場

実来

花万朶樹下に五つもランドセル

未鬼

想ひ出の妣捏ねる草餅

琢葉

令和五年六月十二日 満尾 津山鶴山ホテル・文音

入選

半歌仙『閨の月』の巻

愛媛県 庚申庵連句会

名本 敦子 捌

猫の恋やむとき閨の朧月

芭蕉翁

梅が香満ちてふくらめる閨

名本 敦子

ゆらゆらと揺るる釣釜手を添へて

中田くに子

遮断機の前人のたまれる

菅本 達雄

自転車で駐在さんはパトロール

菅本 つね

海の家には海の幸あり

村上 不映

バランスを崩す地球に西日濃く

寺岡美千穂

S D G s みへぬ本気度

くに子

檀那寺の僧はいたつて色好み

敦子

修羅場過ぎれば夫婦善哉

つね

藪を掘る園児の声の賑やかに

達雄

これはしたりと蛇穴に入る

美千穂

月を待つ百歳の母抱き起し

不映

貧乏神は部屋の片隅

くに子

石鎚山は四国の背骨でんとして

達雄

たすき繋げるアスリート達

美千穂

空の青映して淡き返り花

敦子

ほろりと酔うて冬のあたたか

不映

令和五年五月十五日 満尾 庚申庵・文音

入選

半歌仙『あらし山』の巻

愛媛県 白水台連句会

名本 敦子 捌

六月や峰に雲置あらし山

芭蕉翁

硯を返す郭公の声

名本敦子

独り棲む草屋に轆轤まはしめて

杉山豚望

小腹を充たすポテトチップス

久 翠

蛾眉笑ふチェスの勝負の決まらずに

大西素之

初潮に乗り豪華客船

豚望

カクテルを飾るレモンとオリーブで

翠

舌先三寸磨くドンファン

素之

ひらり身を躲されてより燃えに燃え

翠

世襲議員の憚りもなく

豚望

懺悔とて頭を丸め寒念仏

敦子

空へ向かつてくつさめの月

翠

手品師は袖より鼠とりだして

豚望

夢を詰めこみ旅のトランク

豚望

裏路地を風うねうねと曲りくる

敦子

春うららかに眠る塗り壁

翠

散る花に誘はるるままたもとほり

素之

ニライカナイは陽炎の涯

執筆

令和五年五月十六日 満尾 道後白水亭

入選

半歌仙『野松の枝』の巻

鹿児島県 南さつま連句会

五郎丸 照子 捌

涼しさや直に野松の枝の形

芭蕉翁

腕白坊主の鳴らす麦笛

永濱 瑞穂

ふつくらとシフォンケーキを焼き上げて

林 レイ子

うちのむく犬散歩おねだり

五郎丸照子

さざ波にゆらり撓める湖の月

西村 ミツ

風少し出て纏う新絹

瑞穂

今年酒まず神棚に一献を

レイ子

天文館に人の溢れて

照子

すれちがう元彼もまた彼女連れ

ミツ

頭もたげる胸の小悪魔

レイ子

きつぱりとデータは削除ランニング

瑞穂

政治家いつも知らぬ存ぜぬ

ミツ

寒の月老舗料亭奥座敷

照子

熾炭の香灰とただよう

瑞穂

友誘う昭和レトロの町並へ

レイ子

寅さんシリーズ泣き笑いして

照子

満開の花に祝われ呱呱の声

ミツ

記念撮影蝶も舞い来る

レイ子

令和五年七月十日 満尾 文音

入選

半歌仙『行く駒の』の巻

東京都 四葩の会

静 寿美子 捌

行く駒の麦に慰むやどりかな

芭蕉翁

噴井にひたす藍染めの布

橋本やす子

職人の技の切れ味注視して

植田 也風

三角むすび並ぶ大皿

三輪 慶子

終章の稿書きあぐね明の月

静 寿美子

散歩の道にぬつとかまきり

也

線香の尽きぬ煙の菊供養

や

不意の言葉が耳に残りて

寿

語り合ふ胸の高鳴りそのままに

慶

同じ夢追ひあゆむ星霜

や

尖塔に墮天使羽を休めをり

也

はやり病のために廃業

慶

冬満月砂丘を越ゆるひとり旅

や

熱燗酌みて節税の策

也

翔平は自家用機にて郷帰り

寿

風光る野に駆けまはる子ら

慶

伊那谷の花見の宴にほかいびと

也

吊り橋渡り囀りの中

や

令和五年五月八日 満尾 文京区民センター

入選

半歌仙『夏の海』の巻

神奈川県 伊勢原連句会

庄司 呂折 捌

島々や千々に砕きて夏の海

芭蕉翁

浜昼顔の咲き競う頃

庄司呂折

口笛の得意な友は窓の辺に

根津忠史

炊いたご飯の香り芳し

近藤礼子

月の下一家四代集まりて

呂折

知る人ぞ知る瓢箪の駅

忠史

いくつもの籠の鈴虫大合唱

礼子

草莽の声閉ざすプーチン

呂折

天秤に愛と金とをかけてみて

忠史

見合い写真を積みめば三尺

礼子

偕老を契りて解は自ず明解

呂折

湖渡る神月は皓々

忠史

白鳥に茶がら集めて飛来待つ

礼子

鑑定したらごみは銘品

呂折

まさかまさか四番バッターバンドとは

忠史

春帽高く空へ投げ上げ

呂折

太閤の命をかけし花の宴

礼子

初日間近の弥生狂言

忠史

令和五年六月十八日 首尾 伊勢原シテイプラザ

入選

半歌仙『世界漫遊』の巻

神奈川県 伊勢原連句会

海老原 雅 捌

手を打てば木魂に明くる夏の月

芭蕉翁

風涼やかなせせらぎの葦

廣崎 竜哉

藍染の稀なる色のあらはれて

今井みつ代

理論さまざま著者の数ほど

近藤 蕉肝

譜系図は箆笥の奥の桐の箱

前田 明水

かじけ猫抱く昼の縁側

海老原 雅

劍豪の居合切り裂く寒の水

竜 哉

便りてきばきデジタルの人

みつ代

ウクライナ戦モードもさまがはり

蕉 肝

性の差別を無くす取組

明 水

艶やかな君の笑顔に添寝して

雅

秋の熱海に濁る出水

竜 哉

月の道渡る波間に光あり

みつ代

徹夜踊の唄代はる頃

蕉 肝

上がり場の下駄の左右は柄違ひ

明 水

遍路の宿でチャット通訳

雅

同窓と酒酌み交す花の下

竜 哉

世界漫遊春の夢にて

みつ代

令和五年七月十六日 首尾 伊勢原シテイプラザ

入選

半歌仙『この秋は』の巻

神奈川県 河童連句会

佐野 典比古 捌

この秋は何で年寄る雲に鳥

芭蕉翁

煉瓦の壁を攀じ登る鳶

佐野典比古

観月の宴の笛の届くらん

矢崎 硯水

踊る所作する姿見の前

典比古

膝に乗る猫を撫でれば思い出し

硯水

誰かどこかで嚏一発

同

新調の外套を着る夕時雨

典比古

胸せしつっタラップを降り

同

誇らかに揺らす髑髏のイヤリング

硯水

阿呆陀羅経の元教祖とか

同

いなさ吹き舳を繋ぐ老漁師

典比古

味噌を着に冷酒を注ぎ

同

河童忌の月は夜更けて黄に濁り

硯水

口軍ウ軍の止まぬ戦い

同

島山のさてこれよりは峠道

典比古

湯船でほぐす旅の疲れを

同

俳席を待つばかりなり花の宿

硯水

牡丹雪散りうごき出す鯉

執筆

令和五年七月十六日 満尾 メール

入選

半歌仙『寒くとも』の巻

岡山県 赤のまま

高橋 つらら 捌

人々をしぐれよ宿は寒くとも

芭蕉翁

静寂の中に香る水仙

高橋つらら

工芸展螺鈿細工の鮮やかに

宇野 恭子

主と散歩胴長の犬

ら

碁仇も手を止め仰ぐ小望月

恭

こんもり山に枝豆を盛り

ら

そぞろ神に憑かれてめぐる秋祭

岡本 利英

又読み返す嬉し玉章

恭

潮騒と鼓動と共に結ばれて

ら

夜明けを知らず鴉太声

英

新しき輪袈裟召されて羅漢さま

恭

訪ふ人もなき若沖の墓

英

夕端居月に酌みたる酒に酔ひ

ら

旅の土産の汗疹むずむず

恭

いわくつき軸はお宝かもしれぬ

英

どうやらこれはほんに正夢

ら

咲き満ちて枝垂れて花の鎮もれる

英

県境またぎかかる初虹

恭

令和五年七月二十日 満尾 文音

入選

半歌仙『ぎやうくし』の巻

愛知県 京都府 ふたば会

尾崎 志津子 捌

能なしの寝たし我をぎやうくし

芭蕉翁

竹酔日と集ふ同胞

尾崎志津子

本棚に御伽草子の並びゐて

三原 寿典

心地よきものアナクロニズム

志津子

月の下遺跡調査に没頭し

寿典

木の実時雨は夢のうちまで

志津子

酒蔵の外にこぼるる新酒の香

寿典

右党の佳人ほほを染めたる

志津子

恋文は原稿用紙十五枚

寿典

うぶすな神の御籤大吉

寿典

いざ勝負藤井七冠なにを食ぶ

志津子

討論会で意見分かれぬ

寿典

月出でて鎌鼬とふ怪に遭ひ

志津子

皮衣着こむ郵便脚夫

寿典

やまひ癒え友と連れ立ち北欧へ

志津子

舟舫ふ池薄氷も溶け

寿典

みどりごは花の褥に安らうて

志津子

霞たなびく借景の山

寿典

令和五年七月二十三日 満尾 文音

入選

半歌仙『阿蘭陀も花に』の巻

京都府 あしべ俳諧塾

三原 寿典 捌

阿蘭陀も花に来にけり馬に鞍

芭蕉翁

草餅詰めし螺鈿重箱

三原寿典

茶摘み唄古民家カフェに声届き

増田 敏

ツリーハウスは少年の基地

寿典

雲の波搔き分け進む月の舟

敏

蹴鞆の上蠅螂のみて

寿典

去来忌に一句したため奥嵯峨へ

敏

旅立ちを待つ古き蓑笠

寿典

暮れなずむ浜に肩抱く長い影

敏

何もかも捨て君の御許に

敏

忘れ物猛スピードで丘登り

寿典

ビール飲み干し泡の髭つく

敏

まばゆくも庭一面の半夏生

寿典

泥中の地雷足先に触れ

敏

学校にいつ行けるのと泪の子

寿典

筆を仕舞った階段箆筥

敏

おぼろ月天満宮の苑香り

寿典

雅やかなる春興の舞ひ

敏

令和五年六月二十八日 満尾 文音

入選

半歌仙『春の夜や』の巻

茨城県 水無月会

根本 美茄子 捌

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

芭蕉翁

ほのかにともる盆梅の白

根本美茄子

立ち雛をそつと寝かせて納むらん

早田維紀子

BGMは子等の歌声

岡部七兵衛

久々にまけの揃いて月の宴

高木 遥子

田水落して鎮もれる里

城 依子

赤とんぼ群れて散けてまた群れて

美茄子

竹下通り何時も賑やか

七兵衛

肩が触れふと目が合つて騒ぐ胸

維紀子

さよなら言えず送り送られ

遥子

今は亡きひと偲びつつ香を焚く

依子

いつもの場所に来る地域猫

美茄子

曲り屋の囲炉裏おろちの話など

維紀子

おおきなくさめにゆるる三日月

七兵衛

ゴーギャンの海にあこがれ旅靴

遥子

グラスワインをひとり傾け

依子

花吹雪客待ち顔に露天商

維紀子

眠気引き寄す亀の鳴く声

執筆

令和五年七月十四日 満尾 インターネット

入選

半歌仙『涼しさを』の巻 茨城県 水無月会

大山 とし子 捌

涼しさを我が宿にしてねまるなり

芭蕉翁

夢に現に郭公の歌

大山とし子

リフォームのキッチンとても気に入りて

上条 洲紅

このお弁当いつも手作り

長沢矢麻女

月わたる歴史ロードの太鼓橋

岩月 秋月

菊人形の着替え素早く

洲紅

鬼の子のちちよちちよと鳴くという

とし子

弟何故かお洒落始める

秋月

アラサーの恋は一途に燃え上り

矢麻女

俺が守るよ君の幸せ

とし子

教会の鐘はやさしく響きあい

洲紅

ハイジの走る朝の草原

矢麻女

熱爛に耳朶今も触る癖

秋月

年の用意を覗く月光

洲紅

球界は「最高です」が合言葉

とし子

相好くずし初孫を抱く

秋月

戦止め祈りをこめし花行脚

矢麻女

寄せ来る波に育つ紅貝

執筆

令和五年七月二十日 満尾 文音

入選

半歌仙『目に見ゆるもの』の巻

茨城県 かびれ

大山 とし子 捌

このあたり目に見ゆるもの皆涼し

芭蕉翁

青嶺連なる歌姫の里

大山とし子

命名の師の筆文字の太々に

相馬マサ子

地球儀なぞる子等の耀ふ

森 譜稀子

夕月に声をこぼして雁の列

佐々木リサ

見え隠れする紅萩の揺れ

マサ子

みちのくの宿のご膳に衣被

とし子

遊覧船は島を巡りぬ

リサ

追わるると少し距離置く恋の業

譜稀子

晶子の詩は愛を貫き

とし子

玉砂利の軽ろき音して宮詣

マサ子

平和を祈る広島サミット

譜稀子

被爆者の願い届けと冬木の芽

リサ

熱爛を酌む月の屋台で

マサ子

常備薬毒掃丸もきれせうに

とし子

日課となりし二重縄とび

リサ

笛の音のやがて昂る花吹雪

譜稀子

子猫の戯れる午後の縁側

執筆

令和五年五月二十三日 満尾 文音